

Cat And Honet Sky Leopardess Long way to say Goodbye

BLEACH 碎蜂→夜一
(原作の非公式ノベライズです)

この手がけて届かないことを自分は知っていた。

風は強く木々を揺らしていたが、しなやかに立つ戦士たちを揺らがすことはなかった。世界がたとえ揺るいだとしても、互いの存在は決して変わらないように、雲が流れ、葉がそよいでも互いの視線は堅く結びついたまま離れなかった。

「……懐かしい出で立ちじゃの」

夜一は言った。かすかに浮かぶ表情を碎蜂は読み取る事が出来なかった。強い風の音と同じように吹いて流れていくその声を、碎蜂こそ、懐かしく、また憎いと感じていたのに。

「昔を思い出すか？」

「少しの」

どう、と風の音の鳴るように、情動が碎蜂の胸の内にざわめく。

同じ感情を抱いているのか。いや、そんなことはない、碎蜂は自分に言い聞かせる。自分とこの人が同じであるはずはない。そんなことはあつてはならない。自分が優れているか、相手に届かないか、二つに一つ。自分たちの関係に、同等ということはありませんないのだ。

「……遠慮するな」

まるで貫き通すように、碎蜂は夜一を見た。

「良く思い出せ」

碎蜂はかがみ込み、木の幹に触れた。脈動する血流が冷えた木肌に当たって反射するのを感じる。膝の内へ螺旋のように力が充填されていくのを感じる。

「そして確りと、較べるがいい——貴様と私と」

風のひとときわ高く鳴るを聞いた。

「どちらが優れた戦士であるかを！」

浅い碎蜂の靴音にわずか遅れて、幾重にも重なった風切り音。発せられた声を越し、風よりも早く跳躍する。視線は交錯したまま、碎蜂の右足が夜一へ矢のように走った。確かな反動とともに受け止められる。

時間が止まる。己の足先に触れた夜一の手の実感を碎蜂は重く受け止める。

これは、敵の手だ。紛れもない、敵であるものの左手だ。

敵となつてしまった、彼女の手だ。

時が動き出す。

閃いた右腕を皮切りに、豪雨のような白打の応酬。肘打ちは銃弾の如く、手刀は火矢の如く、膝は大槌の如く走った。その四肢を打ち砕くように碎蜂も動く。掌底は大砲となり、足

先は槍となり、手首は毒蛇となる。撃ち合いの間、目より先に直感が相手の隙間を教えてくれた。繰り返された相手の肘を足台にして飛翔する。足先は伸びて、夜一の真芯を捉えた。どくん、と心臓がかすかに跳ねる。自らの内を流れゆく夜一の重みに確信する。

自分は、彼女より強い。そのはずだ。そうでなければならぬ。

碎蜂の蹴り足を追うように夜一の右手が来る。かすかに避けきれず、碎蜂は肩で受けた。浅い。

それを契機にひとたび脱離する。夜一も追っては来ず、互いにすれ違ふ。

着地の重い音が同時に巨木を打った。

「一撃、食らってしまっただか」

碎蜂はひとひらこちた。かすかに痺れるような左肩の痛みは、いつそ愛しいような気さえた。面白くもない冗談さへ浮かぶ。心の内が酒を食らったかのように浮き立っていた。

「一対二で……痛み分けだな、夜一」

これが痛み分けとは、誰の目にも見えまい。ほぼ無傷に近い碎蜂に対して、夜一の唇からは血が滴っている。

それでも夜一は微笑して言った。

「どしゃぶりの」

そのふてぶてしくもある笑顔に、碎蜂は笑みを返した。眉間に寄るしわを自覚しつつも。

「……その装束に何か仕掛けでもあるのか？ 動きが見違えたぞ、碎蜂」

言われて、碎蜂はひくりと眉を動かした。この期に及んで、装束のせいになど。冗談にも程がある。

「……仕掛け、だとう」

碎蜂の血がふつふつと沸いていた。

「どう思うのか？ 本当に」

大腿に力を溜める間も感じられぬほどの刹那、夜一のすぐ背後に跳躍していた。首筋へ右手の刃を突きつける。夜一は動かない。呼吸さえ読めないような沈黙を保っている。碎蜂は抱くように左腕を絡ませ、刃を締め、己の力を毒を交える。右腕を、敵を貫くための毒針へと遷移させる。儀式の終わりに、睦言のように呪いを囁いた。

「尺敵螫 殺『雀蜂』」

変質した空気を感じたのか、一瞬のうちに腕の中の女は消失した。否、気配は生きている。風が脈拍を伝える。

「逃さん」

飛翔する。気配の先へ回る。振り向いた夜一と視線ががち合う。その目に宿る驚愕に、碎蜂は堪えようもない高ぶりを感じた。その感情を右腕の針へ込め、夜一の鳩尾へ打ち込んだ。

堪えきれずに膝を着いて、幹へ落ちた夜一を、見下すように立った。

「……何故貴様は、私の方が優れているとは考えぬ？ 先程までは私が手を抜いていたのは、何故考えぬのだ」

髪の毛の先まで焦げるような情動が、毒針と化した右手の指先を痺れさせている。戦士として侮られるこの屈辱は堪えがたかった。特に、相手が他にもない夜一であるからこそ、我慢がならなかった。

「……逆上せ上がるなと言った筈だ」

ただ、黙ったまま夜一はこちらを見ている。驚愕に見開いたままの彼女の目を見て、碎蜂の内へわき上がったのは優越感よりは、ただひたすら苦いばかりの劣等感だった。

侮られたままで、相手を殺す訳にはいかなない。

「私は最早、貴様より強い」

幾度となく己に言い続けた言葉を、叩きつけた。

「百年の永きに渡って最前線から退いた代価を」

この永き時間を埋めるための戦いの果てに、

「死を以って知るがいい、夜一！」

碎蜂が言い放った刹那、夜一の表情が苦悶にゆがんだ。

風は、また高く鳴り続けている。

「喰らったな、一撃」

碎蜂はほくそ笑む。相手へ傷を付けることに、一歩ずつ高みへ近づいていく。かつて夢に見た高みへ。

「覚えているか？ 私のこの『雀蜂』の能力を」

脈を打つよな、夜一の血が木へ滴った。

と。

傷のある夜一の鳩尾へ文様が浮かび上がった。毒蛾を思わせる、毒々しくも美しい文様だった。

「蜂紋華——」

雀蜂による初撃で標的の身体に刻まれる『死の刻印』だ、と碎蜂は語った。

「貴様が居た頃はまだ未完成だったこの能力も百年の間に完全なものとなった……」

夜一語りながら百年の重みを碎蜂自ら感じていた。百年の空白は相手にとつてより、碎蜂自身に重く降り積もっていた。

百年の不在。百年の孤独。

それを振り解くための戦いだ。

「精々式撃目を喰らわぬよ逃げられ、夜一」
名を呼ぶたびに胸が疼く。百年前に呼んだ呼び方とは、違

う。

「雀蜂の能力は『式撃決殺』」
同じ場所に二度攻撃を与えればどんな標的も必ず死に至

る。

「てっ」

瞬時に後ろへ。

「式撃目だ、夜一！」

言いながらも、碎蜂は何かを待っている。

最後、自分へ向けられるだろう夜一の瞳。

その色は、何を帯びている？

「……ッ！」

針は浅く切るのみに留まった。振り返らぬままに、夜一は前
へ逃げたのだ。

「ハッ！ 敵に背を見せて逃げて、猶、そのさまか、夜一！」

罵倒しても夜一は振り返らない。木々の合間を駆け抜け、
風を越す速度で跳躍する。斬られた右腕からも背からも鮮血
が吹き出して、さながら林を埋める霧のごとくであった。

「逃げ回って、時間稼ぎのつもりだが、無駄なことだ」

時間。百年の時間。

「以前の私の『蜂紋華』は半刻ほどで消えていたが、今の蜂紋華
に消失期限は無い」

百年の時を経て、それでもなお消えなかった想いと同じよう
に。

「私が自らの意志で消さぬ限り永劫消えることはないのだ」

逃げ回っているばかりでは——

言いさした刹那、夜一の視線が碎蜂を貫いた。脈拍が早くな
る。

来る。

その一瞬後に幹へ支えを求めた夜一の指先は軽やかな音を
立て、しなやかな肢体を自由に舞わせた。二本の暗剣が空隙
を駆け抜ける。

「甘い！」

右腕ではじき飛ばした。

碎蜂にはその先も見えていた。差し出された碎蜂の右腕を
支えに夜一は決殺の踵を下ろす。得意とする体術の連携は百
年前からさほど変わっていない。

「鈍い！」

殺し合いというよりは、まるで求愛の踊りのよみだった。型ど
おりの動きしか見えない。

失望しながら身体をひねる。支えとされた右腕を絡め、振
り下ろされる前の左足へ激烈な蹴りを見舞った。複雑な白打の
応酬の末に、突破口を見つける。それは思いの外易しかった。そ
のことに心から失望する。

長い道のりだった。

さながらを言おう夜一。

碎蜂は心から笑み、右腕の針をかざした。

だが。

交差した夜一の両手の向こう、毒針は辿り着けなかった。夜

一の目の色は、確実に碎蜂を見ていたのに。

互いに離れた刹那、大地へ血が滴った。夜一の左頬に真っ赤
な毒花の如き文様が咲いていた。狙った鳩尾ではなく、左頬に、
だ。

何故だ。

碎蜂の心の内へささ波が立つ。顔は壮絶な笑みを張り付かせ
たまま、あるのに、かすかな不安が波立っていた。

「……理解、出来たか？」

不安を振り払うために、口にする。

「貴様より私の方が優れていると、理解できたなら——」

内側へ練り込んでおいた鬼道を解放する。高濃度の鬼道が渦
を巻いて流れ始めた。

「止めた」

風が、鬼道に合わせて猛っている。

本当ならば封じておこう思っていた技だった。だが心の内の
本能が囁いた。

この技を使わねば、勝てない。届かない。

いや、

使っても届かぬが、もれない。

駆り立てる不安のままに話し続けた。

「驚いたか。初めて見るだろう。これは白打と鬼道を練り合わ
せた戦闘術でな。私が創り上げたものだ。誇りに思え。この技
は先日完成させたばかりでな、実戦で試すのは貴様が初めて
だ。なにしろまだ名前すらついておらぬ——」

「いや」

流れるような碎蜂の言葉を、相手は遮った。

「名ならある」

風の猛りが止んだ。相殺するように、夜一の周りだけ風が鳴
っていない。

「なんだと……？」

『瞬間』と言った

静けさが、夜の如く、彼女の周りを取り囲んでいる。木々がいつの間にか鳴りやんでいる。さうさうと騒がしいのは碎蜂自身の鬼道だけだった。

「……何を、言っている？」

夜一の言葉の先を、聞きたくはなかった。聞けばきつと、納得し、敗北することを受け入れてしまふ。そんな予感があつた。

己の刑戦装束に何故背と両肩の布が無いか知っておるか」

自然に夜一の右腕が伸びる。梢の緩やかにそよぐが如く。

「あつても意味を為さぬからじゃよ」

ぱり、と何かが充ちて触れあうような静かな音がした。

己の技の完成形では術者は背と両肩に高濃度に圧縮された鬼道をまとい、それを炸裂させることで鬼道を己の手足へとたたき込んで戦う。つまり、技の発動と同時に背と両肩の布は「

子供へ教諭すように、夜一は語った。まるで、互いが百年前に戻ったかのような語り口だった。

「ほじけ飛ぶ」

言った刹那に、空間が破裂した。そう見えた。夜一の周囲に

充填された鬼道が炸裂し、手足へ叩き込まれたのだ。先程の言に従つて、布地も無くなつてた。

百年前、同じ装束をまとつていた頃の夜一がそこに立つていた。

強く、届かない、至高の存在が。

碎蜂は見据えられて動けない。

もはや百年の月日は意味を為さなかった。

あの目に見据えられては、もう身動き一つ取れなかった。

「……やれやれ、本当はおぬしと己の技で戦いとうはなかったんじゃがの」

夜一はふつと視線をそらした。終わりだ、と言う代わりに、いとも軽く右の掌を向けた。どこか、哀れみの目で碎蜂を見る。

「氣を付けるよ、碎蜂」

高貴な笑みと共に、今までとは較べ物にならない鬼道の流れが放出された。

問えば、これさえもまだ遊びだと言うだろう。

現に夜一はにこにこ笑んでいる。

己の技はまだ、儂も上手く加減できんからの」

深く抉れた大地に二人、立っている。一人は確として、もう

一人は定まらぬ足下をよもつとに支えているばかりだった。

「何故、儂がこの技を今までおぬしに見せなかったか、分かるか？」

弟子へ教えるよみな口調は百年前と変わらなかった。

布地のはじけ飛んだ衣服は、昔と変わらなかった。

凜と伸ばした背筋も、全身にまとつた気迫も、昔と何一つ変わらないままだった。

「……こんな、ことが。

——変わらないなどいふことが……。

「それは、この技が余りに危険すぎるからじゃ」

「は……真迦な！」

叫ぶなり、碎蜂は駆けた。少しでも目の前にいる存在を乱したかった。百年前と変わらないなどいふことが、あつてはならなかった。

だが鬼道を叩き込んだ右腕はたやすく止められた。まるで優しく握手でもするかのように、柔らかく強く。

「止せ。この技はまたおぬしには早すぎぬ」

反鬼相殺。

相手の鬼道に同質・同量の逆回転の鬼道をぶつけて消滅させる。

だが、これだけの拳速・鬼道圧に対してそれを瞬時に行うなど、常人のなせる技ではなかった。

碎蜂の内側で、鬼道ではない何か渦巻く。吐息としてあふれ出しそで、知らぬ間に奥歯を噛みしめていた。

「……何故だ」

混乱を振り切るために、嘘を吐く。

「私は貴様より強い！」

自分でも信じないよみな嘘を吐く。

「私は貴様を越えたはずだ！」

百年間、自分でも信じていなかった嘘を吐き続けた。

幾重にも拳を突き出し続ける。届かぬと知つても修練に修練を重ねた日々のように、夜一へ向けて、白打を叩きつけよした。

「百年の隔絶は貴様に衰えを」

嘘を吐く。

至高の存在が衰えるわけなど無くとも。

「私に力をもたらした筈だ」

嘘を吐く。

力をつけても届かぬと知つていながら。

「それなのに何故、貴様はいまだ私の前に立っている？ 貴様は

また、私を支配し続ける？」

容易く受け流されながらも、衝動のままに拳を振り回した。最早、武術の型などは存在しなかった。

「答えろ、夜一!!」

答えが得られようはずはなく、

今となつては無為な、甘い昔日が、碎蜂の目の前へ浮かんでいった。

最初の思い出は青空だった。豆粒のようにしか見えなほど遠くで誰かが座っているのを眺めている。

初めから、届かないことを知っていた。

それは多分、この手が雲や星に届かないのと同じ理由だった。

「あれが見えるな、梢綾」

誰かの声が聞こえる。父だろうか。あるいは祖父だろうか。

それとも兄だろうか。だとすれば何人もいる兄のうちの誰だろうか。それすら遠い記憶の霞の中にある。本当なら覚えていなくともおかしくないような、幼い頃の思い出。

「天賜兵装番、四楓院家の姫君だ。いずれ『刑軍』の長となるお方。お前もいずれあのお方に尽くすのだぞ」

が強かった。

元の名、蜂梢綾は入団時に棄て、曾祖母の使っていた『碎蜂』の号を継いだ。自らの全てを刑軍へ、そして彼女へ捧げる気持ちだった。

彼女とは、超然たる白打の才で刑軍に君臨し続ける。天賜兵装番、四楓院家の二十二代目にして初めての女性当主、四楓院夜一。

入団して後、かの当主は模範演舞を行うことが幾度かあった。そのたびに憧れは自分自身でもあますほどにふくれあがつていった。

いかなる者との組み討ちであつても彼女は決して負けることがなかった。その拳、手刀、蹴り、投げ、その全てが高貴にして華麗であり、恐ろしく強かった。彼女は自分の目指す全てを持つていると感じた。

強烈な憧憬は、もはや崇拜に等しかった。

そうして届かないことを認めておけば、それ以上傷つくことは無かったのかもしれない。

それでも、人は近づきたがる。

入団から七年目に、碎蜂は統括軍団長直属の護衛団に入っ

ちらほらと鱗雲の散る空の下。

碎蜂の名を継ぐよりも昔、梢綾と呼ばれていた頃、晴れ着を着せられて、大通りへ赴いた。

輿の上の姫君を、一目見るために大勢が集まってきた。頭

のせられた誰かの手が暖かったことを覚えてい

輿がすぐそばまで来たとき、うやうやしくこうべを垂れた大人たちに混ざつて、びよこりと頭を下げた。しばらく下げているうちに堪えきれなくなった。それほどの至高の存在がすぐそばに居るのに、顔も見られないというのは好奇心がひどくむずむずして仕方がなかった。大人にばれないようにちらりと見上げたとき、姫君と一瞬目が合った。

その目を見た途端に動けなくなった。

初めての出会い、神との対峙に近かった。畏れとは、このような感情を言うのだ、ということを知った。

それはおそらく血に染みついた感覚だったのでろう。代々処刑・暗殺を生業とし続けてきた下級貴族『蜂家』の九代目として生まれた。一族全てが刑軍に入り、生涯を捧げる定めのおうちにある。強さこそが価値の全てであり、刑軍に入ることさえ出来ぬ者はことごとく一族を追放された。刑軍の任務で死んだ兄たちに対してさえ、悲しみよりは力の無さを恥しる想いの方

た。軍団長、すなわち四楓院夜一のそばに近づくためである。

初めての謁見の日、碎蜂は自分の心臓がはじけ飛ぶと思つた。廊下を歩く合間にでも、夢から覚めてどこかここではない場所へ転がり落ちてしまうのではないかと思つた。至高の存在が間近に。その幸福と緊張とが全身に立ち満ちて、こぼれ落ちそうだった。

謁見の間に着いてすぐ、低く低く頭を下げてかしまつた。

「――碎蜂、参りました」

「おお来たか!」

初めて自分一人だけに向けられた声は気さくだったが、碎蜂の耳には天上の鐘とすら響いた。

「話は聞いておるかの?」

「は! この碎蜂、これより心身の渾てを捧げ軍団長閣下をお守りし――」

しかし前々日から考えてきた台詞は途中で打ち切られた。

『閣下』は止せ。堅苦しい」

碎蜂は目をしばたかさせた。知らず知らずのうちに頭を上げている。

目の前の女性はひどくくつろいだ様子で、あぐらをかいていた。不平そうに唇をとがらせるさまには少女らしさが残ってい

た。

「つとどだけて呼んでよいぞ。『夜一さ』か」

「め、滅相もございません！ 軍団長閣下にそのよゝな……」

言いさして、碎蜂は自分がしくしたことに気付いた。

至高の存在だったひとは眉を寄せて、ひどく寂しそうにこちらを見ていた。

この人は神ではない。神に限りなく近いけれど、人なのだ。

碎蜂は薄く頬を赤らめた。

近くにいよゝと決めたのだ。

ならば呼び名もまた、近さを表さなければ。

「それでは……夜一様、とお呼びしても宜しいでしょうか」

かすかに汗をかいて、よゝよそれだけ言った。

夜一は呆れたように呵、と息をついた。

「お堅い奴じゃのう。まあ良い。好きに呼ぶ」

見捨てられたようにそう言われて、碎蜂は小さく眉を寄せた。今のが自分に来る精一杯だった。これ以上なれなれしい呼び方をしたら心臓が爆発して任務が出来なくなってしまう。

碎蜂の困惑した表情を読んだのか、夜一は膝を寄せるように前屈みになった。ごくわずかに距離が縮まる。それだけで碎蜂の胸は高鳴った。

「僕はおぬしの力を見込んで此処へ呼んだのじゃ。呼び方など何でも良い」

そして、夜一はあでやかに笑んだ。

「働きに期待しておろぞ、碎蜂！」

名を初めて直に呼ばれた。そのことだけで、天に昇る気がした。

「は、はい！」

勢い込んで返事をした。そうすることが、名を呼ばれたことへの最大の謝礼なのだと思うた。

何をやるにも迷いが無くなった。そばにいたというだけで嬉しかった。戦いの最中でもただ幸福だった。敵の刃が耳のそばをかすめ、伸ばしていた髪を、こっそり切り取ってしまったも、思うのは『この方の為に死のう』ということだけだった。何度も何度も強く心に誓い続けた。

彼女はまるで猫のような振る舞いをする事があった。無防備に寝ころんだり、他人の夕飯のおかずを取ったり、知らぬ間に後ろへ回り込んだり。そのたびに碎蜂の心臓は飛び出しそうだった。

「もう……夜一さ、様！」

うっかりだけた呼び方をしそゝになってそのたびに言い換える。それに気付いた時、夜一はにつこりとあの高貴な笑みで何かをねだる。

碎蜂はそれに気付かないふりをして、夜一様、と呼び続ける。けれどいつかこらえきれずに夜一さん、と気軽に呼んでしまう日が来る気がした。

そしてその日を心待ちにしていたのだ。

きつともつと近くに行けるだろう。そう思いながら日々を過ごしていたのだ。いつか星や雲に届く日が来る。心から信じていたのだ。

それなのに。

騒ぎにあわてて駆けつけた時、碎蜂を出迎えたのは空っぽの薄暗い部屋だけだった。

別れすら告げることなく、手紙すらなく、唐突に姿を消した。初めから神など居なかった、いや、神と崇拝したこと自体が誤りだったかのようだ。

翌日、中央から伝えられた罪状は『追放罪・浦原喜助の逃走 幫助およびその露見を恐れての失踪』それにより『隠密機動

総司令官職及び刑軍統括軍団長職から四楓院夜一を永久除籍する』という不様極まりないものだった。

神の如く敬愛したひとの、明白な裏切りだった。

裏切った者は今、碎蜂の目の前に居る。

どれほど拳を重ねても届かないのならば、混乱する胸の内を言葉にして叩きつけるしかなかった。

「私は貴様に失望した。貴様を憎み、呪いすらした」

碎蜂の鬼道は荒れ狂い、土埃を舞わせた。心の中が荒れ狂うそのままに。

「そして必ず貴様を越える力を身につけ、私の手で貴様を捕らえてやろ」と誓った

手はけて届かない。どれほど伸ばしてもそのたびに彼女は遠くに行ってしまう。

「私は……貴様を許さぬ、夜一！」

その名を、強く強く呼んだ。呼び声だけでも届け、と。

「私の尊敬と信頼を裏切った貴様を、絶対に——」

しかし叫びはかき消された。

膨大な鬼道がいかずちのごとく碎蜂の鼻先に叩きつけられた。戦いの終わりはとっくに訪れていた。ただ、碎蜂一人がそれ

を認めなかったに過ぎない。

碎蜂の目の前に、終焉の拳が突きつけられていた。

玻璃の如く、鬼道を帯びた空気が凍り付く。今ひとたび碎蜂が動き出せば、大気に充ち満ちた鬼道が炸裂して何もかもがはじけ飛ぶだろう。

きつく噛みしめられた碎蜂の奥歯ですら、きしりとも音を立てなかった。

残心を残して、ゆっくりと夜「が拳を引く。

碎蜂の心はすでに折れているのが明らかだった。

「何故だ……!」

それでも猶、碎蜂は叫ぶ。

「何故……!」

握りしめた拳は届かなかった。

それでも

碎蜂の両眼から熱いものがあふれ出した。折れた心から想いがあふれ出すように。

「何故、私を、

連れて行って下さらなかったのですか」

これを最後にと、名を呼んだ。

「夜「様……!」